

◆特集 第16回日赤図書館協議会◆

教育・研究を支援する図書館を目指して

河合 富士美

抄録：聖路加国際病院医学図書館は、2007年に教育・研究センターに組織変更となった。2005年に開設された教育・研究センターの紹介をするとともに、その後の図書館の変化について述べた。具体的には、電子ジャーナルへの移行とNACSIS-ILLへの参加により受け入れや相互貸借業務の省力化を図り、文献検索ガイダンスの開催やさわやか学習センターの支援強化、センターとしての活動などに力を注いでいる。

Key words：教育支援、電子ジャーナル、相互貸借、予算管理、患者図書館

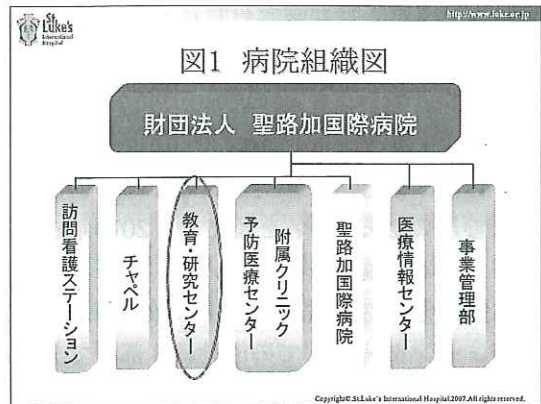
I. はじめに

聖路加国際病院教育・研究センター医学図書館（以下、当院、センター、当館とする）は、2007年4月に病院の組織変更によりセンターの1部署となった。本稿では、当院におけるセンターの役割、及びセンターの一員となって以降の当館の変化について報告する。

II. 教育・研究センター

1. 組織変更の概要

センターは病院の研究・教育活動を統括する部門として2005年5月に新設された（図1）。開設時は教育研修部と研究管理部の2部署で構成されていた。一方、医学図書館は当時病院のコメディカル部門ヘルス・インフォメーション科に位置づけられており、ここには診療情報管理科、フィルム管理科の3部署があった。2007年4月にヘルス・インフォメーション科はなくなり、診療情報管理科は医学情報センターへ移り、フィルム管理科は電子カ



ルテが普及したことにより放射線科に吸収された。

2. 教育研修部

教育研修部は、これまで人事課や看護部、各部署が行ってきた病院内の教育活動を統括する部署である。その業務は、院内職員を対象とした教育・研修プログラムの企画・運営、シミュレーションラボの管理・運営、研修医の教育・研修事務局業務、研修生・実習生の受入れと管理、各種研修会、講演会、ワークショップ、セミナーなどの企画運営などである。

KAWAI Fujimi

聖路加国際病院教育・研究センター医学図書館
fjmkw@luke.or.jp

3. 研究管理部

研究管理部は、治験事務局業務、研究事務局業務、クリニカルリサーチコーディネーター（CRC）業務を業務内容とし、治験・臨床研究の管理および実施支援を行っている。

4. センターとしての活動

各部署としての業務の他にセンターとしての活動を行っている。毎月のセンター会議の開催・記録、ニュースレターの発行が定例業務であり、2009年度の合同事業の目標には以下の2つを掲げた。

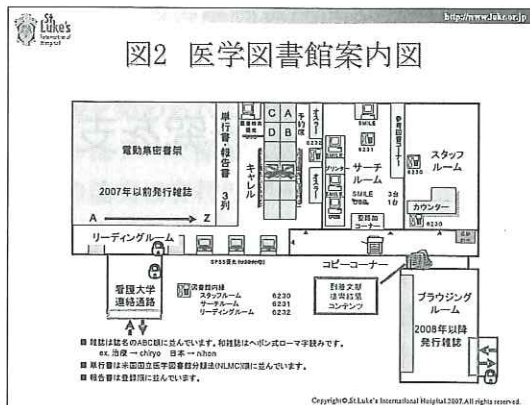
- (1) 外部への教育・研究成果の公開：ホームページの充実
- (2) 聖ルカ・アカデミアの向上と研究の推進

この聖ルカ・アカデミアとは、年1回開催される院内学会で、センターが事務局を担当している。2009年の演題は、口演96題、ポスター41題、研修医業績発表21題であり、院内の総参加者数は600名を超えた。2010年1月に第4回の開催を予定している。

当館は他の2部署と違い少人数の部署であるが、センターとしての活動は3部署で分担されており、当館の負担は大きい。

III. 医学図書館の概要

医学図書館は面積約300㎡で蔵書（館内所蔵分）は単行書約1,500冊、購読雑誌はPrint約80タイトル、電子ジャーナル約3,500タイトルである。スタッフは正職員・常勤の司書が2名、アルバイトの司書が週2日勤務1名、週1日勤務が3名（1日3名体制）で、他に病院のボランティアさんに月・水・金の午前中にお手伝いしていただいている。図書館のホームページは外部へは公開していないのでここにHome画面（図2）と図書館の案内図（図3）をご紹介します。



IV. 電子ジャーナルへの移行

今や雑誌はプリントから電子ジャーナルへと確実にシフトしている。特に病院においては最新のエビデンスの提供が求められているのであり、必要なのは財産としての紙の雑誌ではないと考える。

当館では洋雑誌は数年前にほぼ電子ジャーナルに切り替えた。もちろん、予算も増やしていただいたし、パッケージ契約の際のプリント維持義務がない商品が増えたこと、また、ここ数年の円高の恩恵は大きい。が、細々とした節約も行っている。以前にも及川が報告¹⁾したが、毎日利用統計を取り、いくら権威があっても使っていない雑誌を中止した。図書や製本も切りつめ、余裕のある時に購入する、まとめて製本するなどしている。もちろん電子ジャーナルにはメリット・デメリットがあ

るのでそれらをわきまえた上で各館が選択していかなくてはならないだろう。

電子ジャーナルのメリット

- ①保管場所がいらない
- ②院内どこからでもアクセスできる
- ③統計が簡単にとれる
- ④貸出や製本の手間がいらない
- ⑤欠号や不明等の事故がない
- ⑥検索してそのまま文献を見ることができる

電子ジャーナルのデメリット

- ①契約形態によっては中止後購読期間分のアクセスもできない場合がある
- ②突然「購読していない」というメッセージが出てアクセスできなくなり、クレーム処理に時間がかかる場合がある
- ③年配の利用者を中心に利用方法がわからない、利用しにくいという意見がある

当館では、7年前には雑誌費が全体の75%であったが(表1)2009年度は雑誌とパッケージで98%を占めている(表2)。ただし、2009年度は前年度据え置き予算となったため、雑誌・パッケージを維持すべく特別な予算措置をしているのだが、いずれにせよ9割が雑誌費と考えてよい。

このように洋雑誌購読に重点を置いて予算を立てているので、和雑誌の収集は最低限に抑えている。そのため、「捨てる雑誌はごみ箱に直行させず図書館へください」と積極的に広報をしている。もともと当院では学会誌は購読しないのを原則としている。その成果、といえると思うのだが当館に相互貸借で申し込まれる人気雑誌は寄贈雑誌がほとんどである(表3)。国内誌なのに国内に所蔵が少ない、しかも放っておけばゴミになるものを活用させないともったいないと思うのだがいかがだろう。手間はかかるが得られるものも大きい。

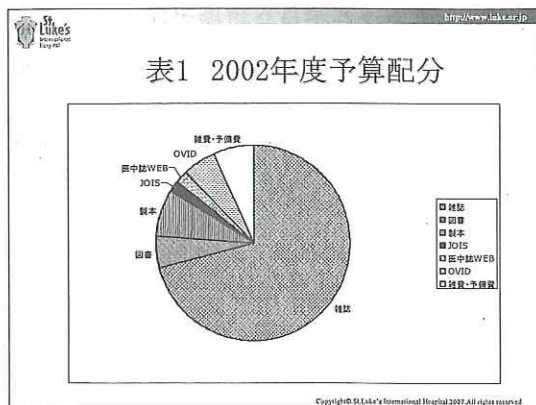
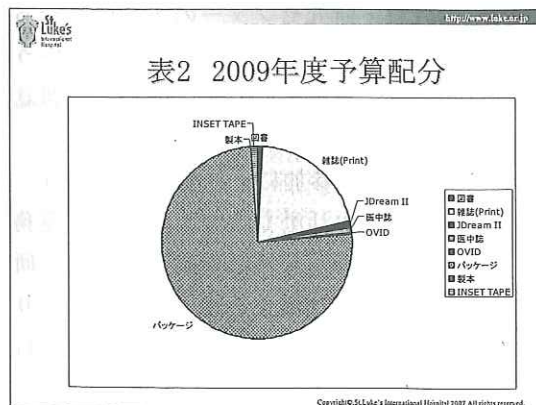


表3 2008年度ILL人気雑誌

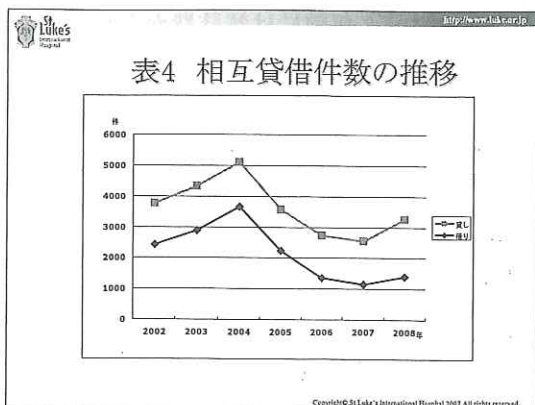
1 Monthly Book Derma	39
2 日本精神学会誌	35
3 臨床精神医学	28
4 Current Opinion in Critical Care	27
5 医学	26
6 日本臨床微生物学雑誌	22
7 JNBS	21
8 日本門脈圧亢進学会雑誌	20
9 日本POS医療学会雑誌	18
10 JNBS: 神経遺伝性膀胱研究雑誌	18
11 Skin Cancer	17
12 日本産科婦人科学会東京地方部会	16
13 泌尿療養プラクティス	16
14 呼吸の臨床	15
15 and Critical Care Medicine	14
16 日本小児整形外科学会雑誌	14
17 Critical Care Medicine	13
18 日本ケニカルバス学会誌	13
19 Support Care Cancer	12
20 Schizophrenia Frontier	12

白抜き=購読誌
太字=電子ジャーナル



V. 相互貸借について

ここ数年一般に相互貸借そのものが減っている。これは電子ジャーナル普及の影響が大きい。当館でも明らかに件数が減少している(表4)。今のところ電子ジャーナルの契約をWebCATに登録している図書館は少なく、逆に病院図書室には文献が入手しにくい状況になっているのではないかと危惧している。



また、今やFAXでの文献申し込みも病院からの依頼がほとんどである。図書館システムの問題もあるので難しい点はあるだろうが、もし他館へ複写申し込みを業務として行っているのであればNII NACSIS-ILLは是非参加すべきシステムであると思う。所蔵雑誌の入力が大変であれば全ての資料を登録しなくてもまず所蔵館の少ない雑誌を登録するだけでも協力機関であることをアピールできるだろう。NACSIS-ILLにはざっと考えただけでも省力化・費用削減につながる以下のようなメリットがある。

NACSIS-ILLのメリット

- ①FAXの送受信が激減（紙・電話代）する
- ②謝絶の再申し込みの手間がない
- ③国立大学にも気軽に申し込める（※相殺制度に参加の場合）
- ④支払い業務の簡略化（上に同じ）

ちなみに当館の記録では、ILLに参加していなかった1996年と2008年でFAX記録を比較したところ、発信枚数では1割未満、受信枚数も4割以下に減少していた。何より手間がかからなくなったということが一番の実感である。

VI. センターとしての医学図書館

このように電子ジャーナルやNACSIS-ILL

の導入で受け入れや相互貸借に掛かっていた時間や労力が随分節約できたと感じている。その余力を活かし、教育や研究をサポートする業務により力を入れている。

1. 文献検索ガイダンスの開催

センターの1部署となった際に教育プログラムを充実させたいと考え、2007年に文献検索ガイダンスを8回開催した。そのうち2回は聖路加看護大学図書館（以下、看大）と共催で行った。2008年からは全回看大と共催し、双方の利用者が参加できるプログラムを作成、11回開催した。今年度はやはり共催で7回開催する予定である（図5）。一人一台の端末での実習形式で行っているため、参加者からの評判もよい。

2. さわやか学習センター

当院では1999年に患者図書館、「さわやか学習センター」を開設した。開設準備段階から司書1名を含む委員会組織で運営されている²⁾。ずっと予算もなかったのだが、2007年度より予算を獲得し、見計らい図書を専門の医師に見ていただいて購入を決めるなど蔵書を充実させている。また、開館時間を延長し、その延長した時間の当番を司書も務めるなどより積極的にサポートを行い、利用を増やしている。

VII. おわりに

当館は教育・研究センターの1部門となったことにより、教育・研究のサポートという目標を常に意識して業務を行っている。雑誌を電子ジャーナルへ切り替えたこと、NACSIS-ILLへの参加により省力化を図り、センターとしての活動や教育、患者支援業務を充実させている。今後は聖路加の歴史や研究を掲載する機関リポジトリの構築や、よりきめこまやかで積極的な研究・教育支援を行っていきたいと考える。

参考文献

1) 及川はるみ：病院図書館における電子ジャーナルへの移行. 日赤図書館雑誌 2006 ; 13(1) : 8-12.

2) 及川はるみ：病院来院者への医療情報支援：聖路加国際病院の事例を中心に. 薬学図書館 2007 ; 52(3) : 226-233.